「ダブルリミテッド」現象に関する一考察

～インタビュー調査の事例から～

小　柴　裕　子

Ⅰ．はじめに

平成26年の文部科学省の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒数は29,198人となり、年々増加の傾向にあるが、その教育課題のひとつに「ダブルリミテッド」現象がある。

「ダブルリミテッド」の定義として、中島（2007）は一つ以上の言語に触れて育つ言語形成期の年少者がどの言語も年齢相応のレベルに達していない状況を意味すると位置づけている（1ページ）。児童の言語能力を考える上で、Cummins（1984）の「言語相互依存仮説[1)]」といった先行研究があるが、「ダブルリミテッド」と称される現象は、児童の成長過程や抱える問題も様々であるため、未だ実態と要因が十分解明されているとは言えない。

本報告では、中国にルーツを持つ児童の「ダブルリミテッド」現象、またはその傾向がある児童の事例を取り上げ、その家庭環境を分析することから、問題の背景の一端に迫りたい。

Ⅱ．調査対象

筆者が継続的に取り組んでいる外国にルーツを持つ児童の実態調査から、ここでは2例を取り上げて紹介したい。

表1．A家庭プロフィール

		年齢	渡日時の年齢	在日年数	出生地	国籍
①	父	42歳	38歳	4年	中国	中国
②	母	42歳	38歳	4年	中国	中国（残留孤児3世）
③	姉	20歳	16歳	4年	中国	中国（残留孤児4世）
④	弟（本人）	12歳	8歳	4年	中国	中国（残留孤児4世）

表2．B家庭プロフィール

		年齢	渡日時の年齢	在日年数	出生地	国籍
⑤	義父	50歳	28歳	22年	中国	中国
⑥	母	44歳	24歳	20年	中国	中国
⑦	兄	18歳	10歳	8年	日本	中国
⑧	弟（本人）	10歳	5歳	5年	日本	中国

1）「母語が発達すれば第二言語に移転する」という説。

Ⅲ．調査方法

調査期間は、2016年の 8 月から10月までの 3 ヶ月間である。意識調査のアンケートを元にインタビュー調査を行った。

Ⅳ．調査事例

１．A家庭

A家庭（弟）は、筆者自身が多文化共生サポーターとして、学校内でのサポートに関わってきた経験がある。来日当時、彼は常に落ち着きがなく、毎日のように他の子にいたずらをしたり、いたずらが元でけんかに発展したりで、学校のクラス担任から怒られていた。学習面でも国語のみならず、算数、理科、社会、体育、音楽等全てにおいて同学年児童に比べ、遅れが見られた。担任より、国語の作文は「中国語でもいい」と言われたが、中国語も書けなかった。

１年半筆者がサポートを続けていた中で、日常会話は上手になったが、問題行動、学力ともに改善は見られず、学校の特別支援員らからは、「発達障害ではないか？」といった話も出ていた。しかし、当時病気とは特定できず、発達障害への対応措置は取られなかった。

今回の調査で、彼の家庭内の環境がよくわかった。A家庭は、両親ともに中国人であり、日本語は全くできない。両親共働きで、日中は家にいない。まず、アンケートを元にした父親のインタビューを確認する。

―你日本学校的一些事情你都不知道吗？就是日本学校是什么样子的・・你知道吧？　（日本の学校の事情について知りませんか？日本の学校がどんな様子とか…知ってますか？）

不知道。（知りません。）

―在日本有没有什么日本的朋友吗？（日本で日本人の友達はいますか？）

语言不通。（言葉が通じない。）

父親は、学校のことを「知らない」と答えている。実際、学校との連絡は全て高校生の姉が請け負っていた。運動会も両親ではなく、姉が応援に来ていて、お弁当も姉が作ってきていた。そのため、学校側からは、全く両親の様子がわからない状態であった。両親らも学校の様子を全く知らなかったことがわかる。また「言葉が通じない」から日本人の友達もいないため、日本社会との関わりも薄いことがわかる。

母語である中国語・中国文化に関しては、以下のように答えている。

―童话，歌曲 你都知道，但是你孩子不知道？（アンケートの童話、歌をあなたは全部知ってますが、子どもは知りませんね？）

都不知道。（全部知らない。）

―想教他吗？（教えてあげたいと思いますか？）

教？这里有的字我都不认得。（教える？ここの字は私もわからない。）

事前のアンケートで提示した中国の童話、童謡に関して、親は全て知っているが、本人は全て知らなかった。しかし、親自身、読めない字が多いため、子に教えてあげることができない。今

回の中国語でのアンケートも姉の助けを得て回答している。家庭内で、中国語で交流していても、読み書きとしての中国語、また一般常識としての中国文化の継承が行われていないことがわかる。

岡本（1982）は、子どもはことばによって、外界の対象を表示するだけでなく、自分の情動や行動を統制したり、さらにその行動の主体である自分という存在そのものを一つの対象として扱うことが可能になってゆくと言う（161ページ）。A家庭（弟）の学校での問題行動の要因には、中国語でも日本語でも自分の考えを表現できない言葉の弱さが関わっていたのではないか。

また、言葉の弱さは、アイデンティティの確立も困難にする。中島（1999）は、言葉の力が弱すぎて自分に対する自信が持てないために、帰属意識（＝アイデンティティ）においても混乱に陥っていると言う（45－58ページ）。アイデンティティに関して、A家庭（弟）は以下のように答えている。

―自分のこと「中国人と思う」って書いてるけど、どうして？
なんか思う。なぜか思う。

父と姉が、アンケートで自分のことを「中国人と思う」と答えていたので、本人も「中国人」と答えたのであろうか。A家庭（弟）のアイデンティティの自覚は、曖昧であった。

A家庭（弟）の事例は、「ダブルリミテッド」による言葉の弱さと問題行動、また中島の述べるアイデンティティとの関連を裏付ける要素になり得るのではないか。

2．B家庭

B家庭（弟）も両親が中国人であり、家庭では中国語である。小学校の他に、地域の日本語教室でも勉強している。1学年上で仲良くしている他の中国人児童より早く来日したが、既に日本語能力は凌駕されている。実際、インタビューでも、途中から中国語になったり、しかしアンケートの中国語は読めなかったりと、日本語中国語ともにリミテッド現象が見られる。

B家庭（弟）は、中国と日本を何度も行き来し、短期間で学校を何度も変えている。したがって、中国での学校経験も浅く、途切れ途切れであるため、中国語は話せるが、読み書きができない。さらに、中国語・中国文化に関しても知識が浅いことが、アンケート調査でわかった。一方、8歳年上のB家庭（兄）は、中国語の読み書き、生活日本語共に問題はない。B家庭内での中国語・中国文化の親子間継承に関して母親のインタビューを確認していく。

―家里有书吗？教会话类…（家に本はありますか？言葉を教える類とか…）
没有。（省略）成语这个他也不知道，他在中国没读小学，课本也没有，只读了半年，拼音也不知道。（ありません。彼は故事成語も知りません。中国で小学校に行ってませんでしたから、教科書もありません。半年勉強しただけなので、ピンインも知りません。）
―我觉得学中文好一些，妈妈你怎么认为的呢？（中国語を勉強しとくのはいいかと思いますが、お母さんはどう思っていますか？）
是这样的，没时间。日本上学太忙。（時間がないんです。日本の学校は忙しすぎます。）

B家庭でもA家庭同様、家庭内で中国語・中国文化の継承が行われていないことがわかる。またアイデンティティに関する質問では、B家庭（弟）は以下のように答えている。

―（省略）自分のことを「中国人と思ったり、日本人と思ったりする」のね。それは、どんな時、中国人と思って、どんな時日本人と思うのかな？

ちょっと、わからない。（省略）

―今はどう思う？

日本ちゃうかな。

―日本人かなと思う？

うん、日本語しゃべってるから。

B家庭（弟）も、アイデンティティの自覚が曖昧であることがわかる。一方、兄は同じ質問に対し、迷うことなく「中国人」と答えていた。B家庭においても、母語、アイデンティティともに確立している兄と対照的に、本人はどちらも確立していないことが伺える。

Ⅴ．おわりに

今回の調査で、A家庭（弟）、B家庭（弟）ともに小学校低学年での国際移動であること、両親が中国人であり、家庭内言語と学習言語の２ヶ国語に日々挟まれていること、両親がこどもへの教育に関与していない、または関与できないことが明らかになったことで、それらが「ダブルリミテッド」につながる何らかの要因であったと言えるのではないか。

また、アイデンティティの自覚に関するインタビューにおいても、中島説を裏付けていたと言えよう。さらに、言葉の弱さが問題行動につながる要因にもなり得ることが見受けられる。

一方、A家庭（姉）とB家庭（兄）は、言葉やアイデンティティの混乱には陥っていなかった。Skutnabb-Kangas（1981）は、その境を９歳としている。７～８歳の国際移動では、両言語の発達が遅れるが、10～12歳以降の移動では、両言語とも年齢相当に発達することが、A家庭、B家庭にも当てはまる。

この９歳を境とした年齢の児童への対応は、学校、家庭の両面から考えていく必要があろう。

本研究は、教育現場からは見えにくい「ダブルリミテッド」現象、またはその傾向にある児童の家庭背景を探る一歩としたい。今後、これらの問題点をより掘り下げていくため、引き続き追跡調査を行うことを考えている。

Ⅵ．謝辞

本研究の遂行にあたり、調査にご協力頂いた方々に深謝致します。

Ⅶ．参考文献・参考サイト

宇都宮裕章（2014）「ダブルリミテッド言説に対する批判的論考」『静岡大学教育学部研究報告』第45号、教科教育学篇。

岡本夏木（1982）『子どもとことば』岩波新書、161ページ。

高橋朋子（2009）『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー　母語教育から継承教育へ』生活書院。

中島和子（1999）「カナダにおける継承語教育」『バイリンガリズムー日本と世界の連携を求めてー』第７回国立国語研究所国際シンポジューム、45－58ページ。

中島和子（2007）「テーマ〔ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象を考える〕について」『母語・継承

語・バイリンガル教育（MHB）研究』第 3 号、1 ページ。
Cummins,J（1984）Bilingualism and special Education, Multilingual Matters.
Skutnabb-Kangas,T（1981）Bilingualism or Not: The Education of Minorities, Multilingual Matters.

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成26年度）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm（2016年 8 月アクセス）